

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

地域で実施する基礎看護学実習の取り組みと今後の
課題：実習の学びに対するレポートの分析

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 二重作, 清子, 谷岸, 悦子, 本田, 多美枝, 小島, 通代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000271

著作権は本学に帰属する。

地域で実施する基礎看護学実習の取り組みと今後の課題 －実習の学びに対するレポートの分析－

State and future problems of basic nursing practice in the community : Analysis of reports of what was learned from practice

二重作清子 谷岸悦子 本田多美枝 小島通代

Kiyoko Futaesaku, Etsuko Tanigishi, Tamie Honda, Michiyo Kojima

日本赤十字九州国際看護大学

The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

要旨

本研究の目的は、地域で生活する健康な人を対象にした基礎看護学実習に対する取り組みを検討し、今後の課題を明らかにすることである。研究方法は、本学1年次生に対して、実習終了後に提出した実習の学びについて自由記述したレポートの分析を行った。学生は対象者と出会い、対話や行動をともにすることを通して、地域で生活する対象者の生活や環境、生活と健康との関連について理解を深めていた。これらの結果は、対象者の笑顔ややさしい言葉などの肯定的な情緒的体験が、学生の他者や自分に対する信頼感となって、対象者との人間関係が形成されたことに影響していたこと及び、学生が実習体験を振り返り、自分を見つめ、成長していくことができる教員の関わりが影響していた。今後、学生の学習プロセスを重視し、持てる能力を育成する教員の関わりの必要性が示唆された。

キーワード：基礎看護学実習、地域、レポート、課題

Abstract

The purpose of this study was to evaluate the state of basic nursing practice for healthy people in the community, and clarify its future problems. First-year students in our college performed basic nursing practice in the community and presented freely described reports of what they learned after the completion of practice. The students deepened their understanding of the life and environment of

the residents in the community and the association between life and health by interacting with them. The students receiving positive emotional experiences such as smiles and kind words developed reliance on themselves and others, and established human relations with the residents. In addition, teachers' interventions enabled the students to look back on the practice experience, evaluate themselves, and grow. The results of this study also suggested the necessity for teachers' interventions that attach importance to the students' learning process and cultivate their ability.

Key word : basic nursing practice, community, report, future problems

はじめに

看護の対象は、健康障害をもち病院に入院している人だけではなく、広く地域で生活することを視野に入れることが必要となった¹⁾。平成13年に開学した本学では、地域で生活する健康な人を対象にした基礎看護学実習を1年次前期に行っている。その目的を、「地域社会において日常生活を送っている個人と、生活の場で接することにより、その個人の生活と健康について理解する。また、人間と環境および健康の相互関連について理解する。さらに、看護の基本的方法である对人的接近および看護学実習における学習方法を実地に学ぶ入り口とする」としている。

しかし、学生の多くは核家族で育ち、生活体験や社会体験は少なく、人間関係を作る力が弱いという特性をもっていることが推測される。このような学生が見知らぬ人の家に向いて、対話を通して対象者の生活や生活に対する思いを理解することは簡単なことではない。学生の臨地実習に対する不安や戸惑い、緊張の大きさはすでに報告^{2) 3)}されている。

一般的に基礎看護学実習イコール病院実習と認識している学生は多いようだ。本学の学生も他の看護教育機関で学ぶ看護学生との情報交換のなかで、地域で基礎看護学実習をすることに対してイメージが湧かないことへの不安や、対象者のご家庭に訪問することに対する遠慮、気兼ねがあった⁴⁾。学生の実習に対する不安や緊張は、実習目標の達成度にも影響するために、出来る早く軽減できることが必要である。

しかし、中村等は、健康障害を持つ病院で入院している人を対象にした基礎看護学実習において、学生は教員の予想をはるかに越えて、自分自身の精一杯の力を注いで患者と向き合い、ケアの本質ともいえるべき、患者との結びつきを確認できるような関わりをみせてくれたと報告している⁵⁾。また、高橋等は、基礎看護学実習において学生の多様な感情が

ある中で、学生が主体的に学ぶ力をつけていくことで実習目的が達成できる⁶⁾ことを報告している。これらの報告は、本学で実施する基礎看護学実習とは実習方法や実習形態、実習環境も異なるが、例え実習場がどこであれ、どのような対象者を受け持つにせよ、学生が対象者と向き合い、学生の持てる力を発揮できるような実習指導が必要であることは共通している。

基礎看護学実習を地域で実施した報告は少ない⁷⁾中で、外村等が、実習が1年時の学習に内発的興味や動機づけなどのポジティブな学習効果を及ぼしたかについて、達成感、満足感、自己評価等を調査した結果、主体的な学習態度の形成につながったことを報告している⁸⁾ように、学生の実習経験がその後の学習に与える影響は大きい。

本研究は、地域で実施する基礎看護学実習の取り組みに対する課題を知り今後の教育的示唆を得るために、学生の学びの実態を明らかにすることを目的とした。

I 研究目的

本研究の目的は、地域で生活する健康な人を対象にした基礎看護学実習の取り組みと今後の課題について教育的示唆を得るために、学生が実習の学びについて自由に記述したレポートの分析を通して明らかにする。

II 研究方法

1. 研究対象：本研究の趣旨を説明し、了解が得られた本学の男子3名を含む1年次生112名。

2. 研究方法：基礎看護学実習終了後に提出した「実習の学び」についての課題レポートを分析する。倫理的配慮として、学生には匿名性によりプライバシーは守れることや、一旦了解したものの、途中で断っても評価や今後の教員との関係性には影響しないことを説明した。基礎看護学実習の具体的な方法については、既に報告している⁹⁾ように、学生は募集により応募された対象者の自宅に、3日間のうち、対象者の都合の良い時間帯に2人1組で訪問する方法とし、訪問する学生は、「①実習前日に対象者に電話で自己紹介をし、②対象者の家庭に内合わせ通りに訪問する、③訪問後には担当教員への実習報告およびグループ毎のカンファレンスを行なう」とし、「訪問日ではない学生は、学内で自己の課題に基づいて学習する」としている。また「実習終了日には、学内で基礎看護学実習の学びについてまとめ・発表会を行う」。従って、学生の課題レポート提出に至る過程は、「実習前の学内オリエンテーション、ご家庭を訪問する実習および、グループ毎のカンファレンス(訪問しない間は学内で学習)、実習終了後のまとめ・発表会、記録物の提出(含課題レポート)」である。

3. 分析方法：基本統計による単純集計および学生が記述した内容をデータとして、類

似したものを抽出してまとめてカテゴリー化する。

4. 研究期間：平成14年3月から平成15年5月。

Ⅲ 結果

分析の結果、総データ数は、1465であり、「対象者との出会い」「対象者の理解」「高齢者のイメージの変化」「対象者からのメッセージ」「自己の振り返り」「今後の課題」の、6つのカテゴリーと24のサブカテゴリーに分類できた(表1)。各カテゴリーの構成比を図1に示した。

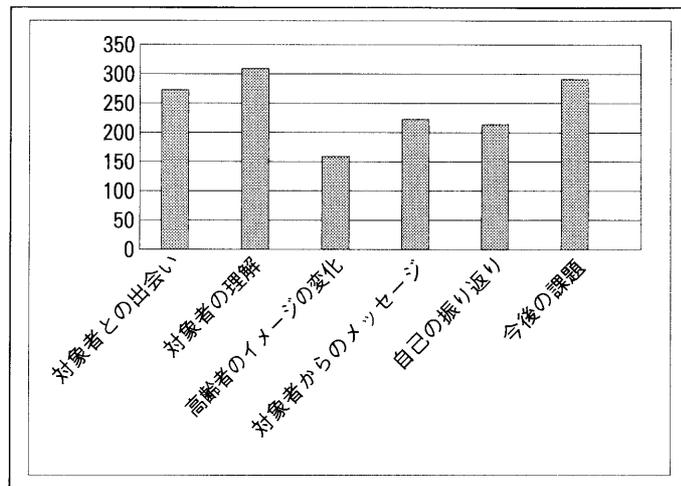


図1.カテゴリーの構成比

「対象者との出会い」

このカテゴリーは、学生が対象者と出会い、その時に感じた印象や安心感、それ迄の不安が軽減したことを示している。この中には、『対象者の笑顔・やさしさ』『受け入れられているとの安心感』『実習に対する不安の軽減』の3つのサブカテゴリーが含まれた。

『対象者の笑顔・やさしさ』：これは学生が対象者に電話をした際や、実際にご家庭を訪問した際に、やさしい言葉や笑顔で迎えられたなどの対象者と直接会話したり出会ったことを通しての印象についてであり、データ数は112(42%)であった。

学生は、「対象者は電話をした際に、やさしく対応された」「対象者に笑顔で迎えられた」「緊張をほぐすために対象者の方から話しかけてくれた」「会話が進まなかったが対象者が気遣って色々話してくれた」「対象者がやさしい方で、ホッと安心した」など記述していた。

『受け入れられているとの安心感』：これは学生が対象者の対応によって、受け入れられていると安心感が生じたことについてであり、データ数は85(32%)であった。

学生は、「電話で自己紹介をした時に、待っていますといわれて安心した」「対象者と出会って、受け入れられていると安心した」「対象者の方はいつでもいらっしゃいといわれた。私達を全面的に受け入れてくれていると嬉しかった」「3日とも心からの笑顔で対応して下さった。安心してのびのび実習できた」など記述していた。

「実習に対する不安の軽減」：これは学生が対象者との出会いによって、実習に対する不安が軽減したとの認識についてであり、データ数は70(26%)であった。

学生は、「対象者と電話での会話で安心した。それから訪問する時間帯や場所などスムーズに話すことができた」「対象者と実際に出会うことで、それ迄の実習に対する不安感が軽減した」「地域で行なう基礎看護学実習に対する不安があったが、対象者と実際に会ったこ

とで不安がなくなり、対象者の1日の生活の仕方や趣味など聞くことができた」「対象者は全面的に受け容れてくれた。それ迄の不安や緊張感が吹き飛んで、翌日も早く会いたいと思った」など記述していた。

「対象者を理解」

このカテゴリーは、『対象者の日常生活』『対象者の体験』『対象者の者の見方や考え方』『家族や周囲への思い』の4つのサブカテゴリーが含まれた。

『対象者の日常生活』：これは学生の対象者の日常生活を理解したことについてである。学生は「対象者との対話や実際に日常生活を共にすることで対象者の日常生活の過ごし方が理解できた（家事や趣味、地域の人との交流など）」「対象者は散歩や食事に注意するなど、健康に注意した生活をしていた」「対象者は健康に注意していないと言われたが、規則正しい生活をしていた」「地域活動やボランティア活動など、人のために時間を使っていた」など記述していた。

『対象者の体験』：これは学生の対象者の体験を理解したことについてであり、データ数は、30（10%）であった。

学生は、「戦争や家族との死別、子育ての苦労や病気の体験について話された」「体験によって健康の大切さや命の尊さの実感したことを話してくれた」「病気の体験をした時に、患者の心理について話してくれた」「病気をした時に、看護師がやさしく対応されたので嬉しかったことや安心感があったと話された」など記述していた。

『対象者の者の見方や考え方』：これは学生が対象者のものの見方や考え方について理解したとの認識についてであり、データ数は91（29%）であった。

学生は、「対象者は無理をせずにあるのままだと生きていくことが大切だといわれた」「対象者は人との交流を大切にすることや感謝して生きているといわれた」「対象者は普通に生きられることが幸せ・クヨクヨしない・肯定的に受け止めるとの考え方を話された」など記述していた。

『家族や周囲への思い』：これは学生が対象者の家族や周囲への思いを理解したことについてであり、データ数は76（25%）であった。学生は、「対象者は家族の健康に注意していた」「対象者は孫の成長が楽しみと笑顔で話されていた。対象者の家族への思いが伝わって来た」「対象者も足腰が弱いのに、高齢の友人の生活や地域の人々の健康を心配していた」「対象者は地域の人々のために活動されていた」など記述していた。

「高齢者のイメージの変化」

このカテゴリーは、対象者と出会って、それ迄の高齢者へのイメージが変化したとの認識についてである。この中には、『実年齢と印象との相違』『対象者の行動力』『地域・家庭

での役割』『固定観念の変化』の4つのサブカテゴリーに分類できた。

『実年齢と印象との相違』：これは学生が対象者の実際の年齢と印象では差異があるとの認識したことについてであり、データ数は、36 (24%) であった。学生は、「対象者の生き生きした表情に驚いた」「対象者は高齢であったが活動的だった」「対象者は1日を家事や趣味、健康を維持するための散歩など活動的であり、それ迄イメージしていたことと異なっていた」「対象者の興味あることに挑戦する姿勢に驚いた」「同じ年代の祖父とは異なり、対象者は物事を前向きに考え生き生きと生きていると感じた」など記述していた。

『対象者の行動力』：これは学生の対象者の行動的な日常生活における行動力について理解したことについてであり、データ数は、52 (34%) であった。学生は、「高齢者は元気がないと思っていたが心身ともに健康だと思った」「対象者が健康なのは心が健康だからであり、心身の健康が大切だと思った」「対象者は身体に悪い部分があっても生き生きと生きている。その人にとっての健康であることを知り、心身の健康が重要であると思った」「対象者は健康保持が大切であると健康に注意した生活をしていた」など記述していた。

『地域・家庭での役割』：これは学生が対象者の地域や家庭における役割について理解したことについてであり、データ数は、42 (28%) であった。学生は、「対象者は高齢であっても家庭のために家事をしていた」「対象者は家族の健康に注意しながら生活していた」「対象者は地域の人のために役員をして活動されていた」「対象者は1人暮らしの高齢者の方に声をかけるなど、気遣っていた」など記述していた。

『固定観念の変化』：これは学生が対象者との出会いを通して、それまでの固定観念が変化したこと、変化する必要があると認識したことについてであり、データ数は22 (14%) であった。学生は、「対象者は身体に悪い部分があっても明るい生き方ができると思った。身体に悪い部分があることは暗いイメージという固定観念があった」「年齢でイメージしたのと違い対象者は元気で活動的だった。しかし、健康には特に注意されていないといわれ、それ迄の考え方が変わった」など記述していた。

「対象者からのメッセージ」

このカテゴリーは、看護を学ぶ学生に対して、対象者からのメッセージとして認識したことを示している。この中には、『心身の健康の大切さ』『看護師の笑顔・対応』『人との交流』『他者や自己を受容すること』の4つのサブカテゴリーに分類できた。

『心身の健康の大切さ』：これは対象者と会話したり、行動を共にすることで学生が実感したこと、心身の健康の大切さについてであり、データ数は、45 (20%) であった。学生は、「看護師は心身の健康が基本」「心身の健康を維持するためには健康的な生活を送る必要がある」など記述していた。

『看護師の笑顔・やさしい対応』：これは看護師の笑顔・やさしい対応が患者には何よ

りも必要であるとの認識についてであり、データ数は54(24%)であった。学生は、「看護師は笑顔ややさしさが基本であり患者は安心できるといわれた」「やさしい対応が人間関係を形成するためには不可欠であると思った」など記述していた。

『人との交流』：これは学生が実習を通して感じた人との交流が重要であるとの認識についてであり、データ数は56(25%)であった。学生は、「人と交流することで視野を広げることができると話された」「人との交流を通して相手を理解することが大切だと思った」など記述していた。

『他者や自己を受容すること』：これは学生が他者や自己を受け入れることが必要との認識についてであり、データ数は72(31%)であった。学生は、「対象者は生き生きとされていたが、関節が悪く坂道が多いので買い物が不便だと言っていた。また、これから年取ることを心配されていたが、自分の身体が悪いことも、年を取ることも十分に受け止めていた」「対象者は高齢になることについて不安があったが、趣味やボランティア活動など、日々を忙しく活動されていた」「対象者と出会って、ありのままの自分を受け入れる必要があると思った」「相手の特性を知って相手のありのままを受け入れることが大切だ」など記述していた。

「自己の振り返り」

このカテゴリーは、実習を体験して、自己を振り返ったことを示している。この中には、『目的意識の不足』『コミュニケーション不足』『基礎知識不足』『学習態度の反省』の4つのサブカテゴリーが含まれた。

『目的意識の不足』：これは学生が今回の実習を体験して、目的意識が不足していたとの反省についてであり、データ数は、22(10%)であった。学生は、「実習への目的意識が不足していたと反省した」「実習の目的・目標をもっと認識すべきだったと反省した」など記述していた。

『コミュニケーション不足』：これは学生が対象者との出会いを通して、コミュニケーション不足であったとの認識についてであり、データ数は、54(25%)であった。学生は、「対象者に対して自分の考えていることが伝えられなかった」「対話は難しく、相手に向き合うことが不十分だった」など記述していた。

『基礎知識不足』：これは学生が実習の体験を通して、基礎的な知識不足であったとの認識についてであり、データ数は、54(25%)であった。学生は、「基本的知識が不足していた。学内での学習不足を感じた」「対象者と出会い、いざ会話する時に何を話してよいか戸惑った。実習目標を達成するために健康に対する知識や、コミュニケーションについて理解していないことを反省した」など記述していた。

『学習態度の反省』：これは学生が実習の体験を通して、目的意識が不足したことや、

コミュニケーション不足であったことなどの自己の学習態度を振り返ったことについてであり、データ数は63(30%)であった。学生は、「自己の未熟さ・無力さを知った・学内での学習態度を反省した」「地域について知識不足を反省し、実習中に調べた」など記述していた。

「今後の課題」

このカテゴリーは、今後の課題について示している。この中には、『コミュニケーション技術』『相手を理解すること』『学習への取り組み』『看護者としての態度の形成』の3つのサブカテゴリーが含まれた。

『コミュニケーション技術』：これは学生の、実習で振り返ったコミュニケーション技術を習得することが今後の課題であると認識していたことについてであり、データ数は54(25%)であった。学生は、「人と向き合い、コミュニケーション技術を高めたい」「思っていることを素直に表現できるようにしたいと思った」「人を理解するためには対話が大切だと思った。今後も人との出会いを大切にしたい」など記述していた。

『相手を理解すること』：これは学生の相手を理解することが自己の課題であるとの認識についてであり、データ数は75(25%)であった。「人との交流を通して人間関係を形成できるように高めたい」「心のふれあいの大切さを学べた。これからも相手の立場に立って考えられるようにしたい」など記述していた。

『学習への取り組み』：これは学生の学習への取り組みが自己の課題であるとの認識についてであり、データ数は25(9%)であった。「学生に出会って嬉しいとの言葉に感動した。対象者の気持ちに込められるよう学習を深めたいと思った」「実習の体験で看護者になると目的が明確になった。学んだことを再度 振り返りたいと思った」など記述していた。

『看護者としての態度の形成』：これは学生の看護者としての態度を形成することが今後の課題であるとの認識についてであり、データ数は79(27%)であった。学生は、「その人の個性にあったケアの方法を考える必要がある」「心と心の繋がりが感じられるような看護師になりたい」「人に向合って相手の立場に立ってものを考えることのできる看護師になりたいと思った」など記述していた。

「実習できたことへの感謝の気持」

このカテゴリーは、実習できたことに対する感謝する気持を示している。この中には、『対象者の理解と協力』『実習関係者の企画・努力』の3つのサブカテゴリーが含まれた。

『実習できたことへの感謝の気持』：これは学生が実習の体験ができたことへの感謝の気持についてであり、データ数は45(15%)であった。学生は「多くの学びが得られた。実習できたことに感謝したい」「自分の課題が見出せた。この実習を体験したから気づくこ

とができた」など記述していた。

『対象者の理解と協力』：これは学生の今回の実習が成立した対象者の理解と協力について感謝についてであり、データ数は49（27%）であった。学生は、「実習で多くの学びが得られた。対象者の方が受け持つことを理解され、協力されたお蔭だ」「知らない人を自宅に迎えることは大変なことだと思う。一般的に普段の生活を見られることは嫌だと思うが、私達を迎えて下さった。看護学生のことを思い、協力されたことに感謝したい」など記述していた。

『実習関係者の企画・努力』：これは学生の今回の実習が成立したのは関係者の努力によるものとの感謝についてであり、データ数は、30（27%）であった。学生は、「人を大切に思うことがわかった。実習できたことに感謝したい。対象者や地域の役員の方と、この実習ができるためには多くの方が関わって下さった」「多くの学びが得られた。全ての関係者に感謝したい」など記述していた。

表1. 学生の学び

カテゴリー	データ数	サブカテゴリー	データ数
対象者との出会い	267 (18%)	対象者の笑顔・やさしさ	112 (42%)
		受けいれられているとの実感	85 (32%)
		実習に対する不安の軽減	70 (26%)
対象者の理解	309 (21%)	対象者の日常生活	112 (36%)
		対象者の体験	30 (10%)
		対象者のものの見方・考え方	91 (29%)
		家族や周囲への思い	76 (25%)
高齢者のイメージの変化	152 (10%)	実年齢と実際との相違	36 (24%)
		対象者の行動力	52 (34%)
		地域・家庭での役割	42 (28%)
		固定観念	22 (14%)
対象者からのメッセージ	227 (16%)	心身の健康の大切さ	45 (20%)
		看護師の笑顔・対応	54 (24%)
		人との交流	56 (25%)
		他者や自己を受容すること	72 (31%)
自己の振り返り	214 (15%)	目的意識の不足	22 (10%)
		コミュニケーション不足	54 (25%)
		基礎知識不足	75 (35%)
		学習態度の反省	63 (30%)
今後の課題	296 (20%)	実習できたことへの感謝	45 (15%)
		コミュニケーション技術	72 (24%)
		相手を理解すること	75 (25%)
		学習への取り組み	25 (9%)
		看護者としてのあり方	79 (27%)

IV 考察

「対象者の出会いから対象者と社会関係への理解への視点の広がり」

学生は、対象者に電話で自己紹介をする際に不安が生じていたが、実際に電話で対象者の声を聞き、安心していた。また、実際に対象者と出会った際の、対象者の笑顔・やさしさから、受け入れられていると安心感が生じ、実習に対する不安が軽減したと認識していた。井上が、対人場面において看護学生が受け取る送り手のメッセージ手段として、聴覚では、会話、視覚では顔の表情、特に笑顔が高いとし、手の動きや視線などの細かい動きにも注意を向け、そこに込められたメッセージを汲み取ることができる様に指導する必要性を報告している¹⁰⁾ ように、学生は対象者の笑顔や会話に、大きく影響を受けることの一部と共通していた。学生は、実際に対象者との会話や行動を共にすることを通して、対象者の日常生活や、対象者の体験、対象者の者の見方や考え方について理解していた。家族のために家事を一手に担い、健康維持するために栄養バランスを考えた食事作りする対象者、遠くに離れて暮らす家族の安否と健康を常に気づかう対象者からは、家族や周囲への思いとして理解していた。また、心身の健康が大切であることや人との交流が必要であること、他者や自己を受容することが安心感につながること、看護師の笑顔・対応が病人にとって何よりも重要であることなどを、対象者からのメッセージとして受け止めていた。さらに、実習できたことを感謝し、自己の学習不足やコミュニケーション不足などを振り返り、振り返った内容を自己の課題としていた。ある学生は、学習を積んで看護師になって人々の健康に関わることで恩返しができると記述していた。

学生は、対象者の会話や、笑顔等による肯定的な情緒的体験が安心感となり、対象者と対話すること、つまり、相手のいうことに耳を傾け、「何が正しい、何が間違っている」と判断せずに、自分もまた、すべてを知り得ぬ存在であると謙虚になり、言葉のやり取りをとおして少しずつ、相手を受け入れ、自分の誤りや未熟さに気づくことができている。また、対象者の思いやりに対して自分のできることを模索し、実習という個人的な体験を、対象者という外部へ向けての個人的な体験にと視点を広げて考えられている。つまり、自己を超えて他者に向かっていたといえる。人が人として発達・成長し、成熟してくるのは、人との関係の中に生きることによってであり¹¹⁾、学生が対象者に語りかけること、対象者からの応答、それによって生じた学生の心の働きによって、学生の過去の学習や体験にプラスされた知識として組み込まれることになる。これは、学生が対象者と向き合うという実習体験によってもたらされた知識体系であり、実習における確実な実りである。

「個別の対象者を理解する必要性」

看護をする場合、対象者との会話によって、お互いの意味を確認し合い、個人の固有性を理解しあうことは重要である。60歳代以上の対象者を受け持った学生は、生き生きとし

た対象者や心身の健康保持への取り組みをされる対象者の姿に、実年齢と印象との相違を認識していた。また、趣味や、ボランティア活動、地域でのコミュニティ活動、家族のための家事や畑仕事などをする、対象者の行動力や地域・家庭での役割に対して、それ迄、高齢者即ち非活動的との固定観念が変化したことを認識していた。健康に対する考え方や健康のレベル、健康を維持する方法は個別の対象者によってそれぞれ異なる。価値観は一人ひとり異なるし、生きた時代や教育に影響されるし世代間に違いがあるのは当然である。生活の仕方の多様性を認め、固定した考え方にとらわれずに、柔軟な考え方が他者を理解するうえで重要である。学生は、自分の枠組みだけに捉われることなく、対象者の日常生活の送り方や健康に対する考え方は個別に異なることに気づいていた。例えば、ある学生は、対象者が健康に過ごしていることは、健康に注意した生活をしていると思っていたが必ずしもそうではないと気づき、ある学生は病気を持っていても、健康と認識している対象者に対しては、健康に対する考え方は個別に異なることに気づいていた。学生は、対象者の生活のあるがままをみつめることで、対象者の身になって感受し、わかろうとしている。対象者を第3人的に突き放して、学生自身が中立の立場に立って対象者との関係の中を生きるのではなく、対象者と学生という、話し合いの中で、話し、聴くことを受けて、これに関わり、反応している。このような学生の姿勢は、どのような対象者に対しても、個別な人を理解することにつながるものであり、援助するうえでの対象者を理解することの核心をなす、看護の基本であるといえるだろう。これらのことを今後につなげる必要がある、学生に対して、看護は人間関係が根底にあることを認識できるような関わりが必要である。

「学生がフィードバックできるような教員の関わり」

臨地実習は、学生にとってかけがえのない経験であり、実習時に出会った対象者に学生がかかわり、そのほんのささやかな1コマでも、これから進むべき看護の方向づけになることもある¹²⁾。学生は今回の実習を意味ある経験であったと振り返り、対象者との出会いから、対象者への共感、対象者の生活や地域社会での役割へと拡大していた。学生は、対象者の生活というもの、その生活と周囲の関係、地域の持つ役割、それらの相互作用に気づいていることがうかがえた。ある学生は、対象者の生き生きとした姿に、自分もそのようになりたいことについて、ある学生は、対象者が生活する地域住民の支えあいのネットワークに対して、将来このような地域に住みたいと思ったと、対象者や対象者が生活する地域をモデルとして認識していた。また、ある学生は、高齢である対象者が自分より高齢の対象者の生活を気にかけていたことを記述していた。学生は、対象者の人に対する気づかい、関心のありようということに視点を当てている。前述したように、看護は人間関係を基盤に実践するものであり、患者の感情に気づくことが、お互いに支えあうことにつながる

13)。対象者は、老いに対する不安や苦しみが無い訳ではない。しかし、自分が苦痛にさらされていることを認めたくて、自分の気持と折り合いをつけながら、立ち向かえるように支えあっている側面があることも考えることが重要であり、これは今後の学習につなげていく必要がある。前述したように、学生は、実習当初は対象者の笑顔や会話に大きく影響を受けていたが、実習の進行と共に、個別の対象者の生活や健康、社会との関係へと視点が拡大し、自分自身の看護学生としてのあり方についても考えられていた。また、対象者の姿から、今をどう生きるかの問題を考える機会になっていたと考えられた。これらの結果は、学生が家庭に訪問したことをそのままにせず、学生の言動の意味を振り返る機会を意図的にもったことが影響していると考えられる。教員は、学生が対象者との対話や行動を通して得られたバラバラであった情報を関連づけ、学生が目標達成のために自己の問題を見出し、自ら解決できる道筋のを見つけ方を示した。また、対象者の言葉や行動の意味を考えるように方向づけ、一つの課題に対してどのように取り組むかを手助けした。対象者のご家庭を訪問する場合、学生はただ、話を聞いて帰っただけでは、実習目標は達成できない。学生の実習状況を直接的に把握できる方法は少ないという限界がある中では、目的をもった会話、その会話から対象者の生活や思いを理解し、対象者の生活や地域社会との関連、対象者の生活と環境との関連など学生の思考を広げることが必要となる。そこには、学生に関わる教員の力量も影響する。教師が教えるという形で学生へ伝えることができる知識の量は限られたものでしかない¹⁴⁾。教員は、学生の持てる力を発揮できるように、学生の学習のプロセスを重視し、考える力を育成する関わりが必要である。

学生が対象者と出会うように、教員もまた学生と出会い、その時々での形成的評価において自己の未熟さを突きつけられる。しかし、自己を内省することで学ぶことができ、成長する存在であることを認識できるプロセスでもある。本学における地域で生活する健康にした人を対象にした基礎看護学実習の取り組みは、今 始まったばかりである。学生の気づきや今後の学習への意欲を大切にしながら、よりよい基礎看護学実習に向けての検討をしたいと考えている。

結論

地域で行う基礎看護学実習の取り組みと今後の課題について、学生が自由に記述した実習の学びについてのレポートを通して明らかにした。その結果、学生は、対象者と出会い、受け入れられている安心感によって、対象者の生活や健康との関連を理解し、対象者の社会生活へと視点が広がっていた。今後、学生の学習プロセスを重視し、考える力を育成する教員の関わりの必要性が示唆された。

尚、本研究の概要については、第32回日本看護科学学会で発表した。

引用・参考文献

- 1) 松岡緑：臨地実習指導案を作成するため必要な考え方－教務と臨床指導者－，
Vol. 42, No2, 94-98, 2001
- 2) 伊田純子・大久保ひろ美・浦野里香他：臨床看護指導者としての課題意識，看護教育，
Vol. 42, No2, 102, 2001
- 3) 村島いさ子：実習生の経験と向かい合う臨床実習教員，より重要となる教師と指導者
の協力，看護教育，Vol. 42, No2, 94-98, 2001
- 4) 二重作清子・谷岸悦子・椿原久美子・蒲池千草・小島通代：地域で行う基礎看護学実
習の取り組みと今後の課題，日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research
Report 第1号，49-59, 2002
- 5) 重久加代子：はじめての臨地実習で経験したケアの本質 受持患者と学生を結ぶもの，
104-110, Vol.44 No.2, 看護教育，2003
- 6) 河原宣子・川出富貴子・前原澄子：生活者重視の看護実践能力を育む教育方法－，
「ふれあいの看護実習」を通して－，第30回日本看護教育論文集 看護教育，41-43，
1999
- 7) 外村由美子・赤塚隆子：地域で生活している人を対象にした基礎看護学実習の考察，
Vol.26 no.3, 105-110, 2001, 看護展望，2001
- 8) 高橋方子・竹本由香里・村上明子他：学生の主体性と気づきから考える基礎看護学実
習，Vol.26 no.3, 90-97, 看護展望，2001
- 9) 井上京子・小松万喜子：対人場面において看護学生が着目するメッセージ手段，79，
日本看護教育学会 第13回学術集会，講演集，2003
- 10) 前掲4)
- 11) 前掲9)
- 12) 看護教育：特集 臨床実習の成果，95, Vol.44 No.2, 看護教育，2003
- 13) 上野轟：第4章 看護の姿勢 看護実践コミュニケーション，17-28，廣川書店，
1995
- 14) 渡部真：大学教育の行方，Vol.44 2, 看護教育，2003
- 15) 二重作清子・谷岸悦子・本田多美枝・小島通代：地域で行う基礎看護学実習の取り組
みと今後の課題，第32回日本看護科学学会 抄録集，374 2002
- 16) 谷岸悦子・二重作清子・本田多美枝・小島通代：地域で行う基礎看護学実習の取り組
みと今後の課題，第32回日本看護科学学会 抄録集，205 2002